

## 『空間』と『場所』「現場」の違いについて～

恐らくは、

“空間の均質性”と“場所の固有性”

もしくは、

“ネットワークの匿名性”と“飛田遊郭のプレゼンス”

みたいな切り口なら、なんとかテーマまで持っていくことはできそうですが、、、。調性理論における「核音イコール場所」で、他の「構成音イコール空間」みたいな捉え方は可能。なようで、やはり、無理があります。正直、全部『空間』です。

ようするに、僕にとって『場所』に繋がる“音楽”なんて無いのです。ステージは『場所』かもしれませんが、客席はやはり『空間』としか思えなく、そこでの音楽は、やはり『空間』そのものです。

音響物理≒波形を除くと、実態としての『場所』に繋がるフォルムが無いのが音楽の特色ですし、フォルムが無いことに対する不安から楽譜が生まれたのかもしれませんが。。。そーか？、

“音楽”=『空間』、“楽譜”=『場所』

なのか？

こじつけですね。

音楽家とその周辺が潜在的に持つ、フォルム不在による不安を解消する手段として、視覚的に形を求める傾向が生まれた、と。なんとかして、音楽を形に残したいと思った、と。そして楽譜が生まれた、と。

、、、少しはあっているかもしれません。

“制度的な役割を持つ音楽”=『場所』、“芸術音楽”=『空間』

みたいなことを言う人もいそうですが、これも違いますね。

『空間』を『場所』に変える“美術”がアートであって、そもそも「音楽はアートでは無い」ってことです。ドイツ解釈の音楽はクンスト(技巧)ですし、フランスに音楽大学は無いですし、、、音楽は芸能です。

「my home, is not place... is people....」

私の故郷は国じゃない、民族だ。つまり私の故郷は、民族だ

(ヴィム・ヴェンダース監督『LAND OF PLENTY』より)

これが答えでしょう、かなり音楽的な言葉ですね。“匂い≒香り≒臭覚≒音楽”に近い“言語”ですね。

「僕の音楽は場所ぢゃない、空間だ。つまり僕の音楽は、民族だ。」一人一民族だ。」

“調性曼荼羅図”そのものです。

そもそも、言葉とはイメージの幅を記号化したものですが、タームとしての『場所』をイメージした途端、それこそ「造園」「土木」「選挙」等の専門外に向かう回路しか機能しなくなるのです、それはなぜか？。。。。

space : an empty area

place : a particular area

(「LONGMAN Basic ENGLISH DICTIONARY」より抜粋)

どっちも同じぢゃないですか。

ならば、space のほうがイカシテル。で、お終い。英国式庭園は place かもしれませんが、日本庭園はやつ

ぱり space でしょ、ユニバースでしょ。

冥王星は先月 place から space に格上げされたらしいですが、ホルストの「惑星」は space だったのに日本人女性が歌ったおかげで place に格下げされた。

space ⇔ place どっちにも行き来可能ってことでしょうか？

#### 能における太鼓の地・基本パターン

太鼓

アウフタクト

声

ヤ ハ ハ ヤ ハ ヤ

こう書くと、これは『場所』ですが、  
実際には

#### 能における太鼓の地・基本パターン（三味線音楽および洋楽的に解釈した場合、能より1拍手前にずれる）

太鼓

アウフタクト

声

ヤ ハ ハ ヤ ハ ヤ

こんな風あんな風に自在に変化し、そもそも単位律動なんて存在しないのが日本音楽＝『空間』。

#### バリの祭りで演奏される「バレガニユール」という悪魔払いのドラムビート（16分のディレイに注目）

クンダン（奏者1）R

クンダン（奏者1）L

クンダン（奏者2）R

クンダン（奏者2）L

これも、書けば単純、聴けばメチャ複雑な＝『空間』。

パスカル・プリソン監督の「MASAI」という映画がありましたが、映画そのものは甘い評価しか許されない雰囲気満載の『場所』映画。

その映画も、DVD video に納められているメイキングフィルムを見ると、

アフリカン・リズムのパターン (カウベルパターンが6/4拍子の、ドラムパターンが付点4分的などに注目)

こんなかんじの『ユニバース』。

ドレミファ〜は『場所』だけど、同じ素材の出発点を変えれば

宇宙ができあがる。

十二等分平均律自体は『場所』だけど、

近似値をこじつけることによって『宇宙』へ至る。

『現場』なら100%受け入れるとして←音楽とニヒリズムは共存できないことの証明として

結局、

『場所』とはm、、、、、、無理です。

部品とか機材とか標題とかみたいな、、ヤハリ書けません。

と、

両手を挙げて終わるべきなのでしょうが、

最後に未解決の問題を上塗りし、結論を避ける目晦まし旋法と致します。

三味線音楽の勘所(弦を押さえるツボ)には、構造的にも絶対視される厳密なスケール上のピッチ(音高)と、イカゲンなほうが人気を博す「ウレイのツボ」とよばれるピッチ(音高)があります。

ひとつ下のピッチも、ひとつ上のピッチも非常に厳格であるのに対し、その間のピッチはかなりの幅(オンチ)がゆるされる、ということです。



同じような例として、

一般的に言うとブルース・スケールには、厳格なピッチの間に「ブルーノート」とよばれるイカゲンなピッチが挟まっています。



『厳格なピッチ＝場所』

とするならば

『イカゲンなピッチ＝空間』

との解釈が可能、

よって『音楽のアーティキュレーションは、場所と空間のバランスに乗っかっているのだ』と断言。『場所が精緻』だからこそ『空間で自由を満喫できる』との応用解釈は正解、な、ようにも思えますが、ことはそう二元論的には収まらなくて、スケール上におけるそれぞれのノートには、それぞれの幅がある。よーするに「ピッチの厳密さには序列がある」。しかも、それらはオクターブの枠を使わずに解釈しなければ、スケール自体が定義不可能らしい。と、いうポストモダン状態に突入しているからで、、、、

三味線音楽に関しては「潜在単位の結合」(by 徳丸吉彦博士)という宇宙のヒモみたいな理論で、ゴージャス且つ明快な説明がされていますが、ブルースに関しては、もお、“味”という拡大解釈で済ませるにはモッタйнаさすぎな、ユニークな理論がいっぱいありすぎて、ジャック・アタリ的には「供儀のレゾー以前のレゾー」で、赤塚不二夫的には「簡単な反対の反対」でヤヤコシイ、、、

思い起こせば46億年前、ヘリウムと水素からなる高温高压の原始大気が出現した時点で

大気圏(波動)＝『空間』、自然倍音列(上方倍音)＝『場所』

が生まれた、と、、、この方向でイケそーに感じつつも

スーフイズム(イスラム教の神秘主義哲学)では「宇宙は音楽によって生まれた(共振)」とまで言い切っています。音楽とは「宇宙のすみずみまで作用している法則の精密な縮図だ」、と。

“音楽の法則＝生命の法則”

モハヤここでの基本元素は“精霊”ですから、どー考えても『場所』が入り込む余地はありません。

それでも強引にテーマに繋げるならば、ものすごく大雑把に言って、

音律＝『場所』 から 音韻＝『空間』 へ

この歓迎すべき退化 devolution が、ポップミュージックの歴史なのでは？

ん～、やはり無理がありすぎます、、

律動に関しても□beat の『共有グリッド＝場所』、『1/f＝空間』みないな曲解はできそうですが、、、。ちなみに、“[グリッド&揺らぎ]の組み合わせ＝グルーヴ”、これって所謂クラシック音楽には無いのです。強拍と弱拍の退屈な繰り返しから、グルーヴを飛び越えて、いきなり(人工的な手段で)拍子を解体したのがクラシック音楽の特徴で、それが特別な筋からの人気を獲得している要因にもなっています。

クラシック音楽がつまらない理由を、僕はこー定義しています

クラシック音楽がつまらない理由その壺・「グルーブを拒否している」ってこと

クラシック音楽がつまらない理由その式・「声部進行がカンペキすぎる」ってこと

“理由その式”についてザックリ解説させていただきますと、西欧音楽の世界では、その学習段階にて「限定進行音」といわれる行き先の決まった音が和声内で設定されていて、たとえ、創作過程にその規則を破っていたとしても、孤独な作業の中でメソッドに引きづられつつ完成に至る作品(これも人気の要因)では、完璧を求めた結果あらゆる声部が規則的に動くこととなり、結果、現代“的”クラシック音楽も、作家が発明した独自のイディオム? =NEO限定進行にディテールが収斂されてしまう。ってことだと思うのです。

といっても、別に僕はメソッドを否定している訳ではありません、

「音楽とメチャクチャ」の違いは「(無意識も含めて)メソッドの有る無し」に因る  
と思っています。

ただ、そのメソッドがイディオマティックに聴こえるのは、作家自身の選択であり=性格=遺伝=シリアスの血だってことですね。メソッドを分け合う精神がクラシック界には欠落(or 不足)してるんじゃないのか、と。

クラシック音楽自体は確実につまらないモノですが、クラシック音楽のシステムは面白いモノだらけです。中でも僕が考える西欧クラシック音楽最大の面白発明は、再生装置としての《超奇形態》⇒オーケストラ(場所)ですね。その偉大な奇形システムを、パスカルを分岐点とする大ZAPPAなシンメトリー(同時逆進行カノン)として今後36億年間残していくことが、伝統芸としてのクラシック音楽最大の存在意義となるでしょう。

一方、ストリートミュージック(≠場所)は、クラシック音楽が忘れ去った“現場”でのインプロヴィゼーション(空間)を発展させることにより、様々な停滞の危機を乗り切ってきたように思います。そして《ネガティブ傾向が強い21世紀のハイアート音楽理論書》など100%無視して、ストリートミュージック理論はマスマス前進しているように(も) (時に)感じるのです。ストリートミュージックは『ハイアート音楽と「現在地(場所)」は同じでも、その矢印(空間)が違う』ということですね。

以上。

内容のわりに長々と書いてしまいましたが、

よーするに

『空間』と『場所』について、考えさせて頂いた結果  
それは、音楽とは関係の無いタームの対比だった。

って

ことが判り、おかげさまでスッキリ致しました。使い慣れない言葉(場所)を定義しようとしても、こじつけにしがらならないって、ことが結論です。、